

# 大学生の英語読解力

—— 調査による一考察 ——

北 尾 謙 治

宮 本 英 男

## I

日本の英語教育は過去1世紀にわたる歴史の中で、種々変遷を遂げてきたものの、現在、大学の教養課程で行われている英語教育で英文講読の授業の占める比重は依然としてかなり大きい。しかし、使用されるテキスト及びその言語材料は、英語教育の科学的研究の進展に伴いかなりの変化を示してきている。そのためか、一方では、テキストの英語の種類や質は千差万別である。これは学生数の増加と多様化やそれに対応するための、多くの場合主観的な判断に基づく、英語題材のレベル設定などに起因するものと考えられる。

このような状況の中で、講読用テキスト、すなわち教材の適切な選定は非常に難しくなっている。教材の選定は、英語の授業目標、目標達成のために「何を」教えるのか、教材の使用目的は何か、更に受講者の英語の力のレベルなどが組み合わされて行われるべきものである。当然、この問題は教材編集者の持つ課題でもある。しかし、残念なことに、この問題解決の核となる大学教養課程の英語教育の目標の具体化は遅れ、言語材料の種類と質についての基準となるべき考え方はまだ整備されていない。

筆者が大学生用講読教材作成のプロジェクト<sup>1</sup>を組んだとき、直面したのもこの問題であった。問題の諸点の解明は力の及ぶところではない。この小

論では、筆者が教材作成の研究に当って実施した調査に基づき、多様化した大学生の持つ英文読解力の実態と困難点をできる限り客観的に明らかにしていきたい。

## II

英語教育の講読用の教材には2つの使用目的が考えられる。教材であるテキストを読んで、その内容を理解すること自体を目的とする場合と、テキストを媒体として、語学的諸相の学習をすること、更に speaking や writing の活動に利用する場合とである。いずれにしても、書記表示された英語を「読むこと」(=reading with comprehension) が主体となる学習活動である。

reading<sup>2</sup> は学習のレベルによってその定義には違いが生じる。初期のレベルでは、Lado など構造言語学者が主張するように<sup>3</sup>、言語の書記表記はスピーチの一部であり、口頭で表わされるメッセージとして再生し意味の理解反応をする活動が reading であると考えられる。

大学教養課程の reading に要求されるレベルは、教材の readability を考慮に入れた、より高度なものとなるであろう。このレベルについて、Rivers の reading の考え方は示唆に富むものである。

The student must (also) be taught to derive meaning from the word combination in the text and to do this in a consecutive fashion at a reasonable speed, without necessarily vocalizing what is being read.<sup>4</sup> [( ) は筆者]

Rivers の立場は、文字を音声化することなく、直接意味の認知を行う高度の reading を目指しているものである<sup>5</sup>。

このような論点に立つと、reading を受動的な活動とすることには疑問がある。受容的活動とする考え方もあるが、次の記述は、コミュニケーション

に於ける reading の機能をより積極的にとらえるのに参考になる。

First of all, psycholinguists suggest we should see reading as an active, rather than a passive, process. . . . Student's reading is an interaction between their own language and experience and the language and experience of the writer.<sup>6</sup>

文字記号によって表出される意味は、Fries が定義したように、lexical meaning, structural or grammatical meaning と social-cultural meaning の結合体である。読み手は意味を理解するために語学的知識とその言語を支える文化についての知識を駆使するのである。更に、そこに内包される意味の認知に到達するには、読み手の能動的な行動が必要である。すなわち、読了した部分についての記憶と後続部分の予知能力が要求される。また読み手の持つ経験などが変数となって影響を与える。このように reading は意味理解のための知識と意味把握を形成する読み手の積極的な働きかけとが複雑に相互作用する活動であり、受動的なものではなく、少なくとも受容的なものと認識しなければならない。

### III

reading ability を数式化したものとして、羽鳥博愛氏の英語の力を表わす一般式（単語力×構文力）+  $\alpha^7$  がある。この数式を reading に当てはめて考えると、（ ）内は短文の理解力を示すものである。個々の短文の理解は reading を形成する一つの要素であるが、それのみで reading は成立しない。 $\alpha$  の中に含まれる諸要素が reading を統合する要因となる。この  $\alpha$  の中に含まれるものは、上述の意味理解のための総合的知識であり、意味の認知を形成する記憶、予知力、経験、経験による概念など読み手の概念形成の能力である。この点で、Goodman が reading を psycholinguistic guessing game とする意味があり、Rivers の目ざす reading の内容が理

解されるのである。

以上, reading とは何か, その目標, reading ability を構成する要素について簡単に述べてきた。講読用教材は教授者の reading の目標と, 受講者の持つ reading ability の両面から選択されねばならない。また指導の過程で, この力が計測されながら指導計画の修正が行われることが必要である。

しかし, 複雑な諸要素の結合から成る reading の力を測定することは非常に困難である。個人的変数となる, 個人の体験, それに基づく概念を形成する思考過程を分析的にとらえることは特に困難である。したがって, 筆者は reading ability を調査するに当って, 次のような留意事項を設定して, その範囲内で見られる読みの力を測り, 問題点を見出すことにした。(1)言語材料としては, 専門領域に入らない, 高等学校卒業時の英語力でもって読める程度の英文で, なるべく新しいものを選ぶこと。(2)英文の文体は数種に及ぶこと。(3)読みのスピードを測定すること。(4)質問は語学的知識に関わるもの, 内容理解については, 表層的に現われているものを直接または間接に尋ねること。(5)類推できる力を試すものを一部加えることなどである。

#### Ⅳ 第1回英語読解力調査<sup>8</sup>

大学生の英語読解力を測定するため, 大学生数百名と高校生百名余りを対象に, 2つの同種のペーパーテストを1980年4月と同年9月に実施した。その方法及び結果を検討する。

##### 1 読解力テスト作成とその構成及び内容

客観的に大学生の英語読解力を測定するために同形式のテストを2つ作成し, JALT English Reading Test: Form A と Form C (以下“A”と“C”と略す)と名づけた<sup>9</sup>。これらのテストでは, 被験者の読解力を多角的に測定するため, 5種類の文体: I 会話文, II 説明文(料理法や植物

栽培法の手順を説明したもの), III 時事文 (ジャーナリズム関係の例として), IV エッセイ, V 詩の5部で構成されている。内容的には米国に関するものが多いが, 特に予備知識により結果が左右されるとは思えなかった。

被験者の読む速度は1分間に百語以内と想定し, 各部, 質問も含め約200~500語の文章である。“C”は“A”より原則として単語数も多く, 内容的にも複雑にしてあるが, 語いについては高等学校卒業までに学習しているもの及び前後関係から推測できるもののみを使用し, 大学生にとって特別難しいテストにならないよう留意した。各部の終りに5問または10問の英問英答形式の質問を設けた。問題は2種類で, 多肢選択のものと記入式のものである。各部20点で計100点である。

表1にテスト構成, 問題の形式及び問題数を示す。

表1 Form A と Form C の構成

テ ス ト	Form A				Form C			
	語 数			問題数	語 数			問題数
	本 文	問	計		本 文	問	計	
会 話 文(I)	172	76	248	5 ( 1 )	296	130	426	10 ( 1 )
説 明 文(II)	118	136	254	5 ( 5 )	255	241	496	10 ( 7 )
時 事 文(III)	237	69	306	10 ( 0 )	291	137	428	10 ( 3 )
エッセイ(IV)	186	156	342	5 ( 5 )	298	143	441	5 ( 5 )
詩 (V)	174	116	290	10 ( 3 )	134	60	194	5 ( 0 )
計	887	553	1,440	35 (14)	1,274	711	1,985	40 (16)

問題数の ( ) 内の数字は多肢選択形式の問を示す。

## 2 被験者の背景

被験者は大学1・2年生と高等学校3年生で, “A”と“C”の両テストを受験した。高校生はある私立の進学校の3年生126名で参考資料として加えた。大学は4校にわたり, 1・2年生, または, 英語専攻とそうでない者に

分けられる。“A”では637名, “C”では試験手順の誤りもあったため539名が分析の対象となった。

### 3 読解力テストの実施

“A”を1980年4月に, “C”を同年9月に上記の各校, 各グループの被験者に実施した。各部ごとに解答のための制限時間を設けた。“A”では各部10分間ずつ, “C”では各部15分間とした。“C”の実施にあたっては, 一部のクラスで黒板に10秒ごとに時間を表示し, 被験者の自己申告による所要時間の記録もとった。

### 4 採点方法

テスト作成者で模範解答を準備し, 各クラス担当者がそのテストを採点した。予想外の解答はすべて列記し, 採点者間で調整し採点基準を統一した。英語で筆記する答は内容を重視し, 文法及びスペリングの誤りがあっても, 中心となる答が合っている場合は正解とした。部分点は一切与えず, 各問4点あるいは2点で集計した。

### 5 テスト結果の分析

“A”と“C”のグループ別被験者の平均点, 標準偏差, 各部の平均点を表2, 3に示す。

表2 Form A の結果

校種	専攻	学年	クラス数	人数	平均点	S.D.	各部別平均点(各20点満点)					
							I (会話文)	II (読明文)	III (時事文)	IV (エッセー)	V (詩)	
大 学	A	英語	2	3	111	72.4	8.7	16.6	18.9	13.2	15.2	8.5
	A	英語	1	3	140	69.3	11.5	15.6	18.9	12.4	14.5	8.0
	B-C	その他	2	2-2	165	69.8	11.8	15.1	18.4	13.0	15.5	7.9
	D	その他	1	4	221	65.3	11.9	13.7	17.8	12.4	14.0	7.4
		全体		14	637	68.6	11.6	15.0	18.4	12.8	14.7	7.9
高 校	普通科	3	3	126	62.1	10.5	14.1	17.6	12.2	10.7	6.9	

表3 Form C の結果

校種	専攻	学年	クラス数	人数	平均点	S.D.	各部別平均点(各20点満点)				
							I (会話文)	II (説明文)	III (時事文)	IV (エッセイ)	V (詩)
大 学	A 英語	2	3	109	65.1	10.5	10.4	11.9	14.1	14.3	14.4
	A 英語	1	3	130	59.9	10.8	9.2	10.6	13.6	13.5	12.9
	C その他	2	2	109	59.4	9.9	8.6	11.1	13.6	13.8	12.3
	D その他	1	4	191	55.3	11.7	7.9	10.3	13.0	13.5	10.5
	全体		12	539	59.2	11.5	8.8	10.9	13.5	13.7	12.2
高 校	普通科	3	3	120	54.4	12.2	8.3	10.0	12.7	12.2	11.2

(1) 全体の結果 “A” と “C” 各々の得点分布図は図1, 2に示した。“A”の大学生の平均得点は68.6であり, “C”は59.2である。約10点の差があるが, 分布図の頂点同士を合わせると分布曲線はほぼ一致する。高校生の場合, “A” と “C” の分布図を比較すると, 約5点の差で分布曲線がほぼ同じになる。

図1 Form A の得点分布

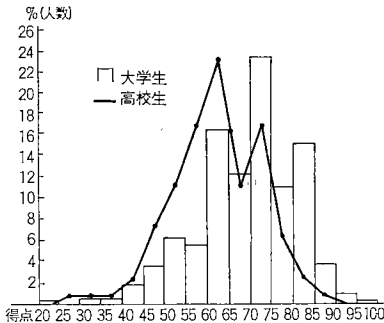
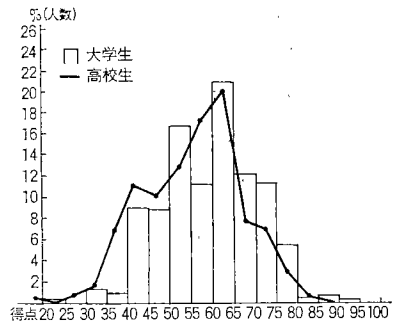


図2 Form C の得点分布



(2) 各部別結果 “A” と “C” 各部の平均点は図3, 4の折線グラフで示した。“A”では大学生は説明文(II)の平均点が一番高く90%の正答率である。次いで, 会話文(I)とエッセイ(N)が高い。そして, 時事文(III)詩(V)で, 詩では正答率が極めて低く40%を割っている。

図3 Form A の各部平均点

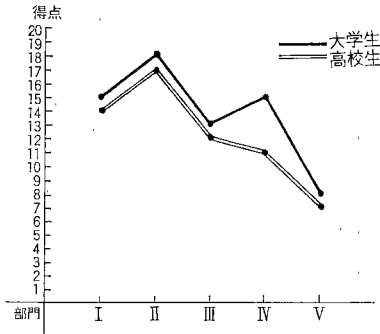
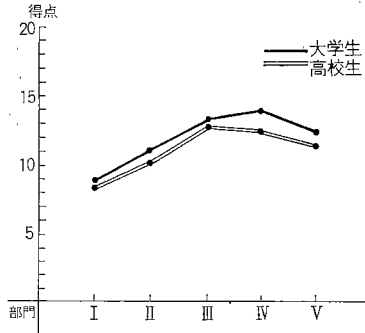


図4 Form C の各部平均点



“C”ではエッセイ（Ⅳ）が一番高く、時事文（Ⅲ）がほぼこれに並んでいる。詩（Ⅴ）説明文（Ⅱ）そして会話文（Ⅰ）の順に続く。

高校生の平均点は、大学生と比較すると両テストでエッセイ（Ⅳ）部門がかなり低く、“A”では明らかに有意差が認められた。しかし、他の部門では大学生の約0.5～1点下で、ほぼ一定の間隔を置いて大学生の平均値の下に並んでいる。

(3) 所要時間 “C”に要した時間を表4に示した。制限時間は15分以内である。詩（Ⅴ）は語数が少なく、質問も5問しかないので他より非常に速くできている。時間は語数のみでなく、文の難易度や問題数と関係しているようだ。エッセイでは、会話文、説明文、時事文に比較して、かなり速く読め、しかも正答率が高い。

表4 Form C の所要時間

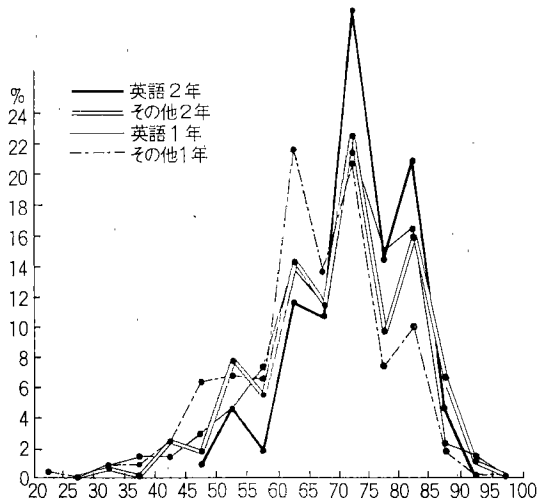
校種	専攻	学年	人数	全 体						
				平均速度	I	II	III	IV	V	
大 学	A	英 語	2	109	53分57秒	13:40	11:47	12:33	8:05	7:52
	D	その他	1	191	61分32秒	14:32	13:31	14:08	9:48	9:33
A/D (%)		—	—	—	87.7	94.1	87.1	88.8	82.4	82.5



(4) 被験者別結果 “A”の大学生と高校生の得点分布図を重ねると、ほぼ10点のずれで分布曲線が一致し、“C”ではほぼ5点のずれで分布曲線が一致する。

図5は、英語専攻者とその他の大学生の得点を比較した分布図である。

図5 英語専攻者とその他の大学生の得点分布



英語専攻の2年生は他のグループより低得点者が少なく、得点分布域が狭まっていて、他のグループと明白な差がある。しかし他の3グループ間には明白な差が見られなかったが、英語専攻の1年生が少し高い得点分布を示している。

## 6 テスト結果の評価

(1) 全体の結果 大学生の平均点が“A”で68.6, “C”で59.2とほぼ我々の予想した通りの結果であった。“A”と“C”の得点分布が類似した傾向を示していることから、両テストが同形式でうまく平行したテストになっていると思われる。採点結果から判断して、設定した時間はほぼ適切であったと

考えられる。

(2) 各部別結果 “A”と“C”におけるエッセイ(N)の得点は高い。この部では大学生と高校生に読解力の差があることが明白である。詩は“A”では極端に得点が低く、“C”でもあまり芳しくない。時事文(Ⅲ)もやや得点が悪く、会話文も他と比較して悪い。説明文では“A”と“C”でかなり差があり、問題形式により得点が大きく左右されることが分かる。

(3) 被験者別結果 大学生、高校生ともに試験結果の傾向は類似しているが、大学生の方が“A”と“C”の各部において得点が高い。英語専攻の2年生は他のグループより“A”のエッセイ以外では各部で高い得点を示している。難しい問題ほど英語専攻2年生の力の優位性がでており、それは会話と詩において明確である。これは文章を読み、筋をまとめながら理解する力の相違を示していると考えられる。

(4) 問題点 暗中模索で第1回調査を行い、多くの大学生の英語読解上の問題点を発見したが、この調査自体の改善すべき諸点も見つけることができた。まず①詩は“C”の方が易しかった。②問題形式によりかなり結果が左右された。③多肢選択問題ではかなりの推測による解答が含まれている。④読解力と時間に何か重要な意味がある。⑤“A”と“C”の結果の差は、テスト間の差か。⑥その間の伸び率がどの程度含まれているか。⑦読解力の高い者と低い者とではどのような違いがあるかなど、多くの問題が今後の検討課題として残された。

## V 第2回英語読解力調査<sup>10</sup>

第1回の調査で十分な分析ができなかったので、第1回の調査方法を改良し、再度1981年4月と同年夏休み前後及び同年冬休み前後の3回にわたり調査を実施した。その方法及び結果を検討する。

### 1. テストの改訂

まず“Ａ”と“Ｃ”を改訂する作業から始めた<sup>11</sup>。同じ５部門を利用したが、“Ａ”の所要時間及び難易度より、Ⅰ 説明文、Ⅱ 会話文、Ⅲ エッセイ、Ⅳ 時事文、Ⅴ 詩の順とし、難易の関係より詩は“Ａ”と“Ｃ”とを入れ換えた。その他の主な変更は、会話文は両方とも書き換えたが、同種の間が使用できるようにし、内容及び難易度は同じになるように配慮した。“Ａ”の説明文は問題が易しすぎるため記述式の間にした。“Ｃ”の時事文は同種の問題が多いので５題に減らした。この他にも被験者に誤解を与える可能性のある間には手を加えた<sup>12</sup>。“Ａ”の改訂版を Form E (“E”と略す)。“Ｃ”の改訂版を Form F (“F”と略す)と名づけた。表５に“E”と“F”の構成、問題の形式及びその数を示しておく<sup>13</sup>。

表 5 Form E と Form F の構成

テ ス ト	Form E				Form F			
	語 数			問題数	語 数			問題数
	本 文	問 題	計		本 文	問 題	計	
説 明 文(Ⅰ)	*118	50	168	5 ( 0 )	*255	238	493	10 ( 7 )
会 話 文(Ⅱ)	167	75	242	5 ( 1 )	292	137	429	10 ( 3 )
エッセイ(Ⅲ)	*186	*156	*342	5 ( 5 )	*298	*143	*441	5 ( 5 )
時 事 文(Ⅳ)	*237	73	310	10 ( 0 )	*291	67	358	5 ( 1 )
詩 (Ⅴ)	*134	* 60	*194	5 ( 0 )	*174	113	287	10 ( 3 )
計	842	414	1,256	30 ( 6 )	1,310	698	2,008	40 ( 19 )

問題数の ( ) 内の数字は多肢選択形式の問題数を示す。

\* はまったく変更がなかったことを示す。

## 2. 被験者の背景

今回のテストの被験者は 3 大学 11 クラスと 高校 3 年生 3 クラスで、“E”と“F”の両テストを受験した。高校は前回と同じ高校の 3 年生百数十名に実施した。大学は 3 大学の 1・2 年生で、五百数十名に実施した。そのうち両テストを受験しなかったものや信頼性のない結果の者は省き<sup>14</sup>、高校生 126

名と大学生 465 名を分析の対象とし, 大学生 8 クラス 341 名の結果はコンピューターで分析した<sup>15</sup>。

### 3. 読解力テストの実施

“E”を1981年4月に, “F”を同年の夏休み前後に実施した。前回同様各部ごとに時間を区切り, 制限時間は問題の難易度や前回の調査の実施状況より各部ごとに決定した。コンピューターで分析した8クラスでは黒板に10秒ごとに時間を表示し, 被験者の自己申告による所要時間の記録をとり分析の対象とした。

1年間の読解力の伸びを検討するために6クラスに対して“E”を冬休み前後に実施し, 4月に実施した結果と比較検討することにした<sup>16</sup>。

### 4. 採点方法

テストを改訂した時に模範解答も準備し, 各クラス担当者がそのテストを採点した。採点方法は前回に準じて行なった。

### 5. テスト結果の分析

“E”と“F”の実施クラス, 実施日, 被験者数, クラス別平均点及び所要時間, その標準偏差等を表6に示した。クラスⅡとⅢは同種のクラスであり, ともにコンピューターに入力したので合併した。

#### (1) Form E と Form F の結果

I 全体の結果 “E”と“F”の結果を比べると大学生の全体で“E”が57.78, “F”が51.73, 高校生の場合は, “E”は55.63, “F”は37.22とともに“F”の方が得点が低く, 14クラス中“F”の方が得点の高いクラスはない。

同じ大学生でもクラス間の平均点の差は大きい。“E”ではクラスⅠが74.96, クラスⅥは37.12と2倍以上, “F”でもクラスⅠは61.0, クラスⅥは35.76と2倍近くの差がある。“E”では高校生より得点の低いクラスが

表 6 Form E と Form F の結果

ク ラ ス	両テストの 被験者数	得 点		所要時間(秒)		
		E	F	E	F	
I 2年英語専攻	M S.D.	46	(47)	(49)		
E 4月16日			74.96	61.0	1,867	2,956
F 7月9日			10.87	10.02	258.33	316.22
II × III 1年英語専攻	M S.D.	82	(94)	(90)		
E 4月16日			59.44	55.59	2,135	3,182
F 7月9日			14.52	11.36	240.30	333.97
IV 1年法学専攻	M S.D.	52	(57)	(59)		
E 4月13日			64.19	54.46	2,152	3,287
F 7月6日			11.82	10.40	162.28	255.55
V 2年混合クラス	M S.D.	57	(68)	(65)		
E 4月15日			56.39	51.65	2,167	3,285
F 7月8日			17.42	14.42	169.27	246.73
VI 2部1年商学専攻	M S.D.	25	(35)	(39)		
E 4月15日			37.12	35.76	2,268	3,437
F 7月8日			15.18	10.76	128.12	194.88
VII 2部1年法学専攻	M S.D.	32	(36)	(35)		
E 4月15日			47.38	38.75	2,200	3,271
F 7月8日			14.16	8.78	150.13	308.89
VIII 1年工学専攻	M S.D.	47	(52)	(49)		
E 4月20日			53.32	51.23	2,288	3,284
F 7月6日			13.17	12.18	171.42	266.57
K 1年英語専攻	M	47				
E 4月15日			59.45	56.72		
F 10月7日						
X 1年言語学専攻	M	33				
E 4月13日			64.61	53.21		
F 9月23日						
XI 2年経済学専攻	M	44				
E 4月23日			48.31	44.18		
F 9月17日						
全 体	M	465	57.78	51.73		
XII 高 校 生	M	126	55.63	37.22		

( ) 内は被験者の数  
M=平均点 S.D.=標準偏差

3つ, “F” でも1つある。“E” では大学生と高校生との平均点の差がわずか  
2.15である。

英語専攻の1年生(クラスⅡ, Ⅲ, Ⅹ)は, “E”においては法学(Ⅳ)と言語学(X)専攻の1年生より得点が低い, “F”においてはいずれも高くなっている。他のクラスでは順位は変わっていない。

夏休みまでに“F”を実施した8クラス(Ⅰ～Ⅶ)341名はコンピューターで分析した。

全被験者の平均得点は, “E”が58.11, “F”が51.88で予想通り“F”のほうが難易度が高い。しかし, “E”のほうが標準偏差が3以上も大きく, 平均点の差の割にはバラつきが大きい。図6, 7にもよくそのことが表われている。

図6 Form E の得点分布図

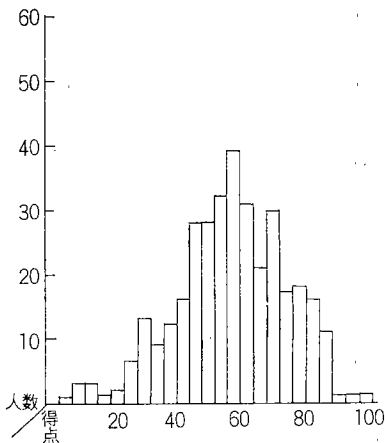
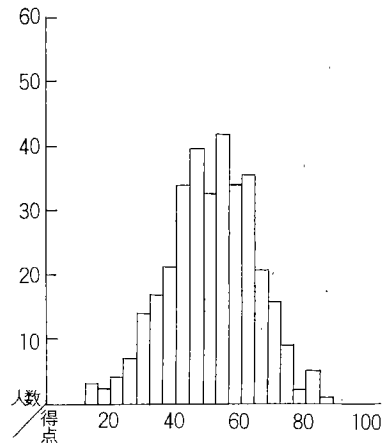


図7 Form F の得点分布図



“E”と“F”の得点の相関は予想以上に高かった。(表8参照)

Ⅱ 各別結果 各部門の平均点及び所要時間を表7に示した。相違点をより明確にするためにグラフにしたのが図8である。

“E”と“F”における全被験者の結果は, とともにエッセイ(Ⅲ)が高い。他の部門の難易度は“E”と“F”で異なるが, 詩(Ⅴ)が難しいのは一致

表7 Form E と Form F の各別結果

テスト形式	部 門		配 点 制限時間	全被験者	上位群	下位群	上位群 下位群 (%)	高校生	
E	得 点	全 体		100点	58.11	77.97	37.25	47.77	55.63
		I II III IV V	説 明 文 会 話 セ エ ッセ イ 文 時 事 文 詩	20点	11.47	15.56	6.67	42.86	11.62
				20点	10.78	15.44	6.44	41.73	11.11
				20点	12.47	16.89	6.94	41.12	8.79
				20点	12.41	15.08	10.14	67.22	13.69
	20点	10.98	15.00	7.06	47.04	10.44			
	時 間	全 体		40分	35:43	33:15	37:40	113.29	
		I II III IV V	説 明 文 会 話 セ エ ッセ イ 文 時 事 文 詩	6分	5:47	5:32	5:58	107.53	
				7分	6:27	5:57	6:48	114.01	
				8分	6:41	5:57	7:13	121.01	
9分				8:34	8:23	8:44	104.38		
10分	8:14	7:25	8:57	120.67					
F	得 点	全 体		100点	51.88	68.25	34.33	50.31	37.22
		I II III IV V	説 明 文 会 話 セ エ ッセ イ 文 時 事 文 詩	20点	10.26	14.00	6.22	44.44	7.49
				20点	11.23	15.22	6.97	45.81	6.78
				20点	13.40	16.50	9.44	57.24	8.05
				20点	8.23	11.06	5.94	53.77	7.60
	20点	8.76	11.47	5.75	50.12	7.32			
	時 間	全 体		60分	53:44	49:21	56:51	115.20	
		I II III IV V	説 明 文 会 話 セ エ ッセ イ 文 時 事 文 詩	13分	11:36	10:17	12:19	119.61	
				15分	13:21	11:47	14:27	122.49	
				10分	6:01	7:14	8:41	120.09	
12分				11:12	10:43	11:39	108.55		
10分	9:34	9:19	9:46	104.65					

全被験者：341名 上位群：72名 下位群：72名

している。時事文（Ⅳ）と会話文（Ⅱ）は問題によりかなり得点が異なっている。T検定では、会話文のみが有意差がなく、他の部門はすべて0.01レベルで有意差があった。

高校生と比較すると、大学生は両テストともエッセイで最も差をつけている。“F”においては会話文や説明文でも大きな差がついた。その反面両テストで差の最も小さいのが時事文である。

“E”と“F”の各部門別の相関関係を表8に示した。

図8 Form E と Form F の得点

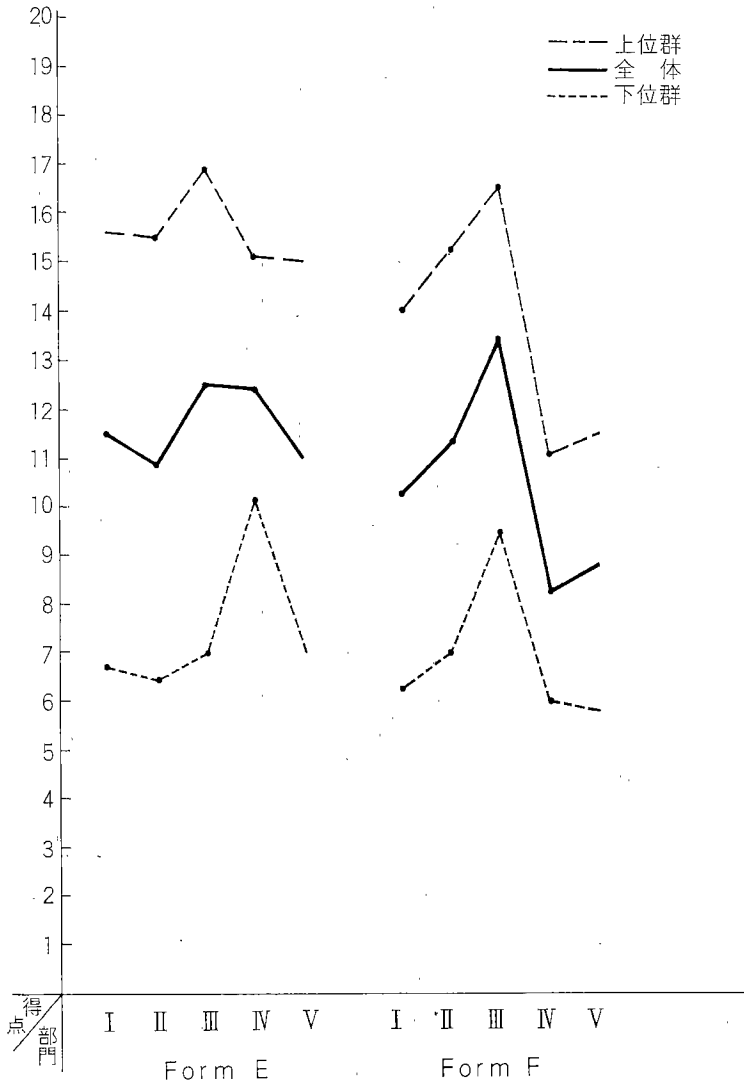




表8 Form E と Form F の各部門別相関

全 体	I 説 明 文	II 会 話 文	III エッセイ	IV 時 事 文	V 詩
.69	.41	.43	.26	.16	.33

全体としては相関が高かったにもかかわらず、各部門ごとではあまり高くない。特に時事文の相関は.16で低い。

“E”と“F”における全体と各部門の相関を表9に示した。

表9 テストの得点と各部門得点の相関

	I 説 明 文	II 会 話 文	III エッセイ	IV 時 事 文	V 詩
Form E	.74	.68	.71	.60	.66
Form F	.74	.70	.66	.61	.68

多少“E”と“F”の部門間の相関は低かったが、テスト全体と各部門の相関は非常に高く、最も低い時事文(N)ですら“E”で.60, “F”で.61である。

Ⅲ 所要時間 “E”と“F”の所要時間を表7に示し、それを図9に図式化した。

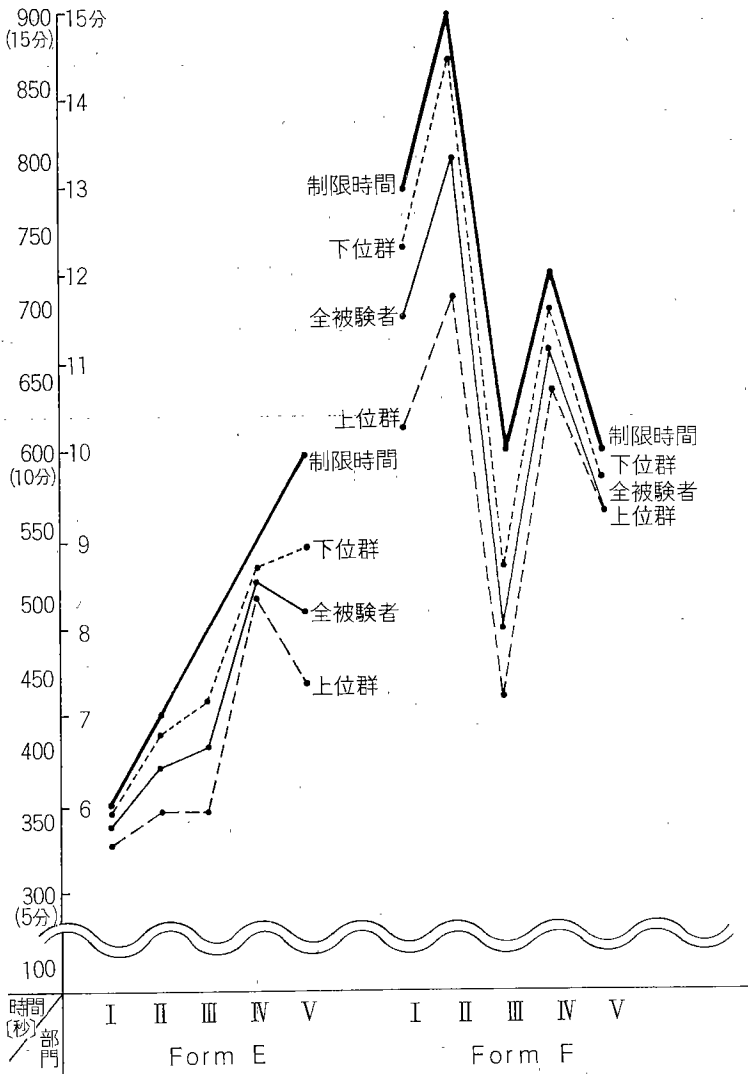
両テストとも制限時間に比例して平均所要時間は制限時間の80~95%程度である。全体では“E”で89%，“F”で90%である。エッセイ(Ⅲ)は両テストとも速く読んでいる。会話文(Ⅱ)も割合速い。説明文(Ⅰ)と時事文(Ⅳ)で時間がかかっており、詩(V)は“E”では速いのに“F”では非常に遅くなっている。

所要時間と得点の相関を表10に示した。

表10 Form E, F の時間と得点の相関

	全 体	I 説 明 文	II 会 話 文	III エッセイ	IV 時 事 文	V 詩
Form E	-.51	-.42	-.43	-.36	-.29	-.24
Form F	-.44	-.37	-.49	-.23	-.27	-.15

図9 Form E と Form F の所要時間



全体的には、“E”で $-0.51$ “F”で $-0.44$ と、時間の速さと得点には多少の相関がある。予想通り時事文では相関が低く、詩やエッセイでもかなり低い。

Ⅳ 被験者別結果 両テストの結果を更に詳しく分析するために、そして被験者の英語読解上の問題点や傾向を探るために、成績の上位者と下位者に分けて検討する。

(2) 成績上位者と下位者の Form E と Form F の結果

341名の被験者で“E”と“F”の両テストでそれぞれ上位30%，下位30%の被験者を抽出した。その結果、上位群は“E”で66点，“F”で60点以上72名，下位群は“E”で52点，“F”で44点以下で、多少の人数の調整をし72名抽出した。各群全被験者の約23%である。

上位群と下位群の両テストの結果を表7に示し、得点を図8，時間を図9に図式化した。

Ⅰ 全体の結果 下位群は“E”で上位群の43%，“F”で44%の得点である。下位群の“E”と“F”の得点差はわずか3点しかなく、T検定でも.01レベルで、有意差がない。

Ⅱ 各部別結果 上位群はエッセイ(Ⅲ)が最も得点が高く、“E”では説明文、会話文、時事文、詩と続くが、“F”では会話文と説明文、詩と時事文の順位が入れ換わっている。下位群では、“E”においては時事文が最も易しく、詩、エッセイ、説明文、会話文の順であり、“F”ではエッセイ、会話文、説明文、時事文、詩の順で詩が時事文より難しくなっている。“E”と“F”両テストで、上位群は比較的全被験者の結果と似ているのに、下位群はかなり異なったユニークな結果を示している。“E”では時事文のみが上位群の67%も得点しているが、“F”ではエッセイで57%、時事文で54%である。

上位群は会話文とエッセイで有意差がないのに、下位群はエッセイと時事文のみで有意差がある。

Ⅲ 所要時間 両テストの各部門において、上位群の所要時間は下位群より短い。上位群は制限時間の72~93%程の時間で、下位群は87~99%程を要している。両テストにおいて所要時間が制限時間にほぼ比例している。特にエッセイと会話文での差は大きい、時事文の差は小さい。説明文と詩は両テストで異なっている。

所要時間と得点の相関を表11に示した。

表11 Form E, F の時間と得点の相関

被験者	テスト形式	全 体	I 説明文	II 会話文	III エッセイ	IV 時事文	V 詩
上位群	Form E	-.46	-.45	-.31	-.15	-.30	-.16
	Form F	-.35	-.42	-.39	-.14	-.37	-.32
下位群	Form E	-.28	-.22	-.25	-.18	-.21	-.13
	Form F	-.14	.09	.07	.06	-.26	.13

上位群では、両テストにおいてスピードの速い者ほど得点が高くなっているが、下位群の“F”では時事文を除いて逆になっている。上位群ではエッセイと詩が低くなっているのに、下位群では時事文のみが高い相関を示している。

Ⅳ 被験者の伸び 1年間の英語読解力の伸びを調べるため“E”を再度12月と1月にコンピューターに入力した8クラス中6クラスに実施した。3回のテストを受験した261名の結果を表12に示した。

(3) Form E の第1回及び第2回の結果

全被験者の第1回の“E”の結果は61.71、第2回は75.89で約23%の伸びを示した。所要時間も35分29秒から29分48秒、約84%に縮まっている。

“E”の1回目と2回目の得点の相関は、.50、時間の相関は、.67とかなり高い。

各部門別にみると、会話文と説明文の伸びが大きく、エッセイが最も小さい。エッセイは2回目では第4位に落ちている。

時間では会話文と詩が最も速く読めるようになっている。

1回目と2回目の得点の相関は、エッセイが最も高く次に会話文である。

表12 Form E, Form F, と Form E (2回目) のテスト結果

被験者	部 門				配 点	テ ス ト					
						E (1回目)	E (2回目)	E <sub>2</sub> /E <sub>1</sub>	F	E <sub>1</sub> とE <sub>2</sub> 相 関	
全 被 験 者	得 点	全 体				100点	61.71	75.89	122.98%	55.16	.50
		I II III IV V	説 話 エ ッ セ イ	明 話 セ ッ シ 	文 文 イ 文	20点	12.34	15.75	127.63%	11.03	.26
						20点	11.60	15.85	136.64%	11.95	.37
						20点	13.36	14.85	111.15%	14.15	.46
						20点	12.79	15.43	120.64%	8.71	.24
	20点					11.62	14.01	120.57%	9.33	.27	
	時 間	全 体					35:29	29:48	83.98%	53:18	.67
		I II III IV V	説 話 エ ッ セ イ	明 話 セ ッ シ 	文 文 イ 文		5:46	4:50	83.82%	11:30	.35
							6:24	5:12	81.25%	13:11	.50
							6:35	5:38	85.57%	7:53	.55
						8:33	7:27	87.13%	11:11	.40	
	8:12					6:42	81.71%	9:33	.55		
上 位 群	得 点	全 体				100点	79.52	84.19	105.87%	69.41	.20
		I II III IV V	説 話 エ ッ セ イ	明 話 セ ッ シ 	文 文 イ 文	20点	15.78	17.19	108.94%	14.30	.09
						20点	15.93	17.56	110.23%	15.52	.25
						20点	17.19	17.41	101.28%	16.74	.44
						20点	15.22	16.33	107.29%	11.19	.18
	20点					15.41	15.70	101.88%	11.67	.43	
	時 間	全 体					32:59	25:10	76.30%	48:32	.43
		I II III IV V	説 話 エ ッ セ イ	明 話 セ ッ シ 	文 文 イ 文		5:32	4:13	76.20%	10:07	.31
							5:50	4:10	71.43%	11:32	.26
							5:58	4:35	76.82%	7:02	.24
						8:21	6:51	82.04%	10:32	.18	
	7:18					5:21	73.29%	9:20	.50		
下 位 群	得 点	全 体				100点	42.74	64.93	151.92%	40.37	.22
		I II III IV V	説 話 エ ッ セ イ	明 話 セ ッ シ 	文 文 イ 文	20点	8.30	13.70	165.06%	8.04	.09
						20点	7.78	13.04	167.61%	8.48	.22
						20点	8.67	11.93	137.60%	11.56	.42
						20点	10.30	14.19	137.77%	5.85	.11
	20点					7.70	12.07	156.75%	6.44	.12	
	時 間	全 体					37:56	33:56	89.46%	56:48	.45
		I II III IV V	説 話 エ ッ セ イ	明 話 セ ッ シ 	文 文 イ 文		5:58	5:26	91.06%	12:18	.22
							6:50	6:07	89.51%	14:19	.22
							7:21	6:34	89.34%	8:39	.36
						8:42	8:09	93.68%	1:38	.42	
	9:06					7:39	84.07%	9:54	.28		

全被験者：261名 上位群：54名 下位群：54名

時間ではエッセイと詩が最も高くなっている。

#### (4) 成績上位者と下位者の読解力の伸び

成績の上位の者と下位の者の伸びの異なりを検討するために、第1回目の“E”と“F”のそれぞれともに得点が上下約30%以内の者を抽出し、下位群で人数の徴調整を行った。上下54名になり、上位群の下限は“E”が70点、“F”が62点で、下位群の上限は“E”が54点、“F”が52点であった。予想されたことではあるが、上位群の伸び率は下位群より下回っており全体で約6%である。下位群は52%伸びた。しかし、所要時間では上位群は76%に、下位群は89%になり、上位群のほうが速くなっている。

部門別では、上位群が会話文、説明文、時事文の順で得点が伸びたが、下位群では詩が時事文より伸びている。上下位群ともエッセイの相関が高いが、上位群では詩も高いが、下位群は非常に低い。

所要時間では、上位群では会話文と詩がかなり速くなっている。時事文の伸びが最も少い。下位群では詩がとくに速くなったくらいで、他の部門はあまり変化していない。

## 6 テスト結果の評価

### (1) 第1回 Form E と Form F の結果

我々が意図したように“E”と“F”は同形式の相関のある平行なテストとなり、“F”のほうが難度が高い。

平均得点の差を考慮に入れても、“E”の得点は“F”に比べ標準偏差が大きい。つまりバラつきが大きくなっている。これは各質問の形式によると考えられる。

大学生は、大学、学年、専攻などによりかなり英語読解力に差がある。“E”では、法学と言語学専攻の1年生が英語専攻の1年生より得点が高いが、“F”では逆転している。これはForm E 実施後の英語専攻学生の読解力の伸長によるものと理解するほうがよい。

高校生と比較すると、“E”ではあまり差がないのに、“F”で大差がついたのは意外であった。問題の内容と大きい関係があると思う。

両テストともエッセイが容易であり、大学生と高校生の差もここが最も目立っている。詩の読解力は予測されるように低いが、大学生は高校生より高い得点を取っている。詩の読解が学生にとって難しいことを両テストの結果は明らかに示している。詩には、他の文体よりも深い内容理解と把握の力が要求されるからである。

会話と時事文は両テストで非常に得点が異なる。問題の違いからであろう。時事文では大学生と高校生の差があまりない。時事文に関しては“E”と“F”の相関が非常に低いから、想像による解答がかなりあると思われ、正解の信頼度は低い。

各部門により得点がかかなり異なり、問題点が皆無であると言いきれないが、全体の得点との相関はかなり高いので、極端に問題のある部門はなかったと考えられる。

所要時間の平均が制限時間の約90%に“E”“F”ともになっているのは興味深い。エッセイが両テストとも速く読んでいるのは、日常もっとも慣れた文体だからであろう。説明文と時事文で時間がかかっているのは、数値間の関係等を理解しなければならなかったからであろう。詩は内容と問題によりかなり時間が異なる。

時間の速さと得点の高さには関係がありそうである。両テストとも $-0.51$ と $-0.44$ の相関で、どの部門でもマイナスで、特に説明文と会話文の相関は高い。

## (2) 成績上位者と下位者の Form E と Form F の結果

両テストとも下位群は上位群の43%程しかできておらず、下位群は両テスト間に有意差がないので、かなり得点が低くしかも偶然性が高いことが分かる。

各部門別の結果は、上位群は両テストとも全被験者の結果と似ているのに、

下位群はユニークである。時事文が“E”で最も易しい。これは恐らくあて推量の結果である。上位群のほうがむしろ考えすぎたのか、時事文は他の部門より悪くなっている。エッセイが悪いのも下位群の特徴であろう。下位群にとって詩はよほど難しいらしい。

有意差の検定より判断すると、下位群はかなりどの部門でもあて推量で解答したようである。

上位群のほうが所要時間はかなり短い。特にエッセイと会話文で明らかであるが、時事文では差が少ない。上位者は慎重に取り組み、下位者はかなりあて推量で答えたからであろう。

上位者のほうが“E”のエッセイのみを除いて時間の速さと得点の高さとの相関が高い。

下位群ではかなりゆっくり行い、“F”では時事文以外時間をかけた者が高い点を取っている。制限時間を短くすることにより、上位者と下位者を区別するのは可能のようだ。詩の相関が低いのは理解できるが、エッセイの相関が低いのは意外だった。

### (3) Form E の第1回及び第2回の結果

よく大学では、日がたつに従い英語力が落ちると言われている。しかし、4月と冬休み前後に Form E を同じ被験者に実施したところ、得点で23%伸び、時間は16%短縮している。2回のテストの得点の相関は.50、時間は.67とかなり高く、結果は信頼できる。

各部別では会話文と説明文の伸びが大きい、エッセイは小さく、すでに内容把握力の伸長の限界に近づいているようである。

会話文と詩がかなり速く読めるようになったのは、直読直解に慣れてきたからであろう。

得点と時間両方でエッセイの相関が高い。これはエッセイを読むスピードとその理解が5部門中最も安定していることを意味し、今までに読み慣れているからであろう。



## (4) 成績上位者と下位者の読解力の伸び

得点においては、上位群はあまり伸びておらず限界に近いことが分かる。下位群は52%程も伸びたが、64.93で上位群の第1回の得点79.52よりはるかに下である。大学生の読解力の差は大きく、多少のことでは下位の者が上位に入ることは不可能なように思える。

時間では、面白いことに、上位群のほうが第1回から5分程度速く読んでいるのに、第2回ではこの差はより大きくなり8分以上となった。これは読む速度はかなり伸びる可能性があることを示している。読解力のある者は訓練でかなりスピードを増すことができるという確信を得た。

部門別では、上位群はエッセイと詩ではすでに上限に到達していて、会話文、説明文、時事文の順で伸びているが、下位群では会話文、説明文、詩が伸びている。どの大学生も会話文や説明文に慣れていないことが分かるし、下位者は詩のような形式の文体から意味を類推する力に欠けている。下位群の時事文の解答にはかなりの推測が含まれていることがよく分かる。両者ともエッセイの相関が高いので、この文体には慣れ、読解も安定しているであろう。

上位者は会話文と詩が速く読めるようになり、時事文の伸びが最も少ない。これは計算など意味の把握に副次的作業を行わねばならないことが影響していると思う。下位者は詩の解釈が少し速くできるようになっている程度で、他はあまり変化なく、ゆっくりと読んでいることが分かる。

このように上位者と下位者の差が所要時間に明白に現われたのは興味のある結果である。

## VI ま と め

2年にわたり大学生の英語読解力の調査を実施した。各大学生の英語読解力レベルはまちまちではあるが、兩年とも五百名におよぶ大学生に実施しているので、この調査から大学英語読解指導上の何らかの示唆が得られたと思

う。主な点をまとめてみたい。

大学生はエッセイのような英文を読み慣れており、その読解力及びスピードはかなり安定しているが、他の種類の英文には慣れていないと判断できる。読みのスピードは不十分である。特に詩と会話文は苦手ようである。

成績と読む速度は比例する。成績の高い者ほど速く読めており、より高い相関を示している。

1年間の英語学習で読解力も伸びたが、読解スピードの伸びの方が目立つ。得点の高い者ほどスピードがより速くなり、伸び率も高い。低い者はほとんど変わらない。

得点の高いグループの読解力の上限を計るには、このテストのレベルでは不十分であることが判明したが、一方、そのスピードはまだまだ伸びる可能性があることがわかる。大学生はかなり遅く読んでるのが実情である。

## VII 今後の問題点

大学生の読解調査の結果を説明したが、大学生の読解力の差はまちまちであるので、この被験者が代表的な大学生と言えるかは疑問である。

“E”は最初のテストでは難易度が適切であったと思うが、2度目には上位者には少し易しかったようだ。

実施時間も1度目はかなり適切だと思えたが、これを短くすることにより、かなり結果が異なると思われる。上位者のみで、もっと短い時間で実施すると興味のある結果が得られると思う。

部門ごとの検討は行なったが、各問の誤答分析には言及しなかった。解答が記述式か多肢選択か、問題が直接質問か間接質問か、解答のために情報を整理する必要があるかどうか、計算や解釈の必要があるかどうかなど、問題の形式、内容により誤答の傾向が異なってくる。

本テストでは、間違いか正解かのみで判断し採点したが、間違いの種類や原因追求は行っていない。今後検討したい。

この小論では紙数の関係で調査の概要に基づく分析を行い読解力を考察することに止めた。上述のように、更に問題点を明らかにするためには質問の形式、質などの分類、得点との関係などを追求する必要がある。このことについては、誤答分析の結果に焦点を置いてまとめを進めている「英語読解力の問題点」の中で論ずることにする。

言うまでもないことではあるが、英語の読解はこの5部間に限定されていない。他にも多様な形態があり調査してみる必要がある。しかし、エッセイ以外のものを利用して、新たな種々の教訓を得られたのは大きな収穫であったと考える。

#### 注

- 1 このプロジェクトは、全国語学教師協会 (J A L T) の研究助成金を受け1979年12月に発足、1980年11月、再度同助成金を受け現在に至っている。メンバーは当初は筆者の他 Vincent Broderick, Barbara Fujiwara, Lesli Sackett で、後に井上紀子, Kathleen Kitao が加わった。1981年3月に実験教材 *An American Sampler* を印刷、1981年3月には改訂した実験教材 *An American Sampler Vols. 1. 2. 3.* を印刷、その Vol. 1 は今秋 Addison-Wesley Publishing Company により米国で出版される。
- 2 reading は音読と黙読の両活動を含むが、ここで取り扱うのは黙読を主体とする活動である。
- 3 Lado は次の様に述べている。To read is to grasp language patterns from their written representation. . . . written expressions are partial representation of the spoken forms. *Language teaching* (New York, McGraw-Hill, Inc. 1964) p. 132 Bloomfield, Fries, Carroll も表現の差こそあれ、同じ見解をとっている。
- 4 W. M. Rivers, *Teaching Foreign-Language Skills* (Chicago: The university of Chicago Press, 2nd. ed. 1981) p. 261
- 5 Rivers の目標とする reading は、熟達した読み手の力であり、母国語の reading について K. Goodman, F. Smith の言うレベルのものである。
- 6 S. N. Judy & S. J. Judy, *The English Teacher's Handbook* (Cambridge, Mass.: Winthrop Publishers, Inc. 1979) p. 114
- 7 羽鳥博愛, *A Guide to English Teaching Procedures* (東京, 大修館 1979) p. 107
- 8 第1回の調査については、1980年10月、第19回大学英語教育学会 (JACET) 大会、

- 及び同年11月, 第6回全国語学教師協会 (JALT) 国際大会で発表し, 以下の小論にまとめ発表されたものを修正, 加筆した。井上紀子, 「日本人大学生の英語読解力について」日本英語教育学会 (JELES) 関西支部研究集録4 (1980年3月) pp. 36-40.
- 9 両テストの作成は, 筆者の他に, Vincent Broderick, Barbara Fujiwara, Lesli Sackett と井上紀子が行った。
- 10 第2回の調査結果の一部は, 1981年11月, 第20回大学英語教育学会 (JACET) 大会で発表した。
- 11 改訂者は筆者の他に, Vincent Broderick, Lesli Sackett, Kathleen Kitao と井上紀子である。
- 12 問題の削除や改訂は, 各解答の誤答分析の結果に基づいて判断した。
- 13 「E」の split-half reliability は.43で, 「F」は.73であった。
- 14 信頼性のない答案とは極端に無答の多いもの数枚を意味する。
- 15 コンピューター入力のための資料の作成及び点検は筆者の他に, 井上紀子と Kathleen Kitao が行い, コンピューターでの分析作業は北尾謙治が行った。
- 16 2部のクラスⅥとⅦは後期に担当者が代り, 実施できなかった。
- \* 1980年度のクラス担当者は, A大学2年北尾, A大学1年 Leslie Sackett, B大学井上紀子, C大学及びD大学の1クラス宮本, D大学の3クラス, 北尾, 高校 Vincent Broderick である。1981年度はクラスⅠ～Ⅶが北尾, ⅧとⅩが宮本, ⅪとⅫが Sackett で高校は Broderick が担当した。
- \*\* この小論は, 購読用教材作製のため, プロジェクトチームで共同研究したものを筆者がまとめた。筆者両名で共同討議と作業を行ったのち, 読解力についての理論展開と調査結果の分析のうちコンピューター利用以外の分析作業, 図・表の作製は主として宮本が当り, 諸分析に基づく解説及びコンピューターによる分析作業, 図・表の作製は主として北尾が担当した。

Japanese College Students' English  
Reading Ability  
— A Study Based on Testing —

Kenji Kitao

Hideo Miyamoto

English has been emphasized in college in Japan, and of the four skills, reading has been the major skill taught in college English courses. Thus, there are countless English reading textbooks for college students. English reading textbooks should be chosen on the basis of the purpose of the class, interests of the students, and students' English proficiency levels. However, the goals of college English courses are usually not specified, and many teachers are not sure what linguistic content should be taught. It is also not clear that how well college students can actually read English. In our College Reading Materials Research Project, partially funded by Japan Association of Language Teachers (JALT) research grants in 1980 and 1981, we have tried to find out how well college students can read English and what their problems are in reading English in order to develop suitable reading materials for college students.

In order to investigate college students' English reading proficiency, we made two parallel tests, JALT English Reading Test: Forms A and C, each of which has five sections: a dialogue, directions, a newspaper

article, an essay, and a poem. Five or ten multiple choice or short-answer questions are provided in each section and each section is worth twenty points. These tests were given to more than five hundred college students and more than one hundred high school students in April, 1980 and in September, 1980.

The results of the tests show that students understood essays better than any other type of passage. Students had particular difficulty with poems and newspaper articles. College students understood essays much better than high school students did, and sophomore English majors did much better on poems and newspaper articles than any other college students did.

We revised Forms A and C slightly to make Forms E and F. We administered Forms E and F to about five hundred college students and more than one hundred high school students on April, 1981 and before and after summer vacation, 1981. We administered Form E again before and after winter vacation in order to find out how the students' English ability had improved. We analyzed the test results by computer.

We chose about thirty percent of the students from the top and bottom of Forms E and F in order to clarify the students' problems. We later chose about thirty percent of the students from the top and bottom of both administrations of Form E, and we compared the scores and times.

The results of the second year testing show that students understood essays best and poems least, and college students did much better than high school students on essays. Students read essays fastest and directions and newspaper articles most slowly. Students with lower scores guessed at answers a great deal. There was a high correlation between

reading ability and reading speed. There was a higher correlation between reading ability and reading speed among students with higher scores than among students with lower scores. The scores for the second administration of Form E were twenty-three percent higher than those for first administration of Form E. Students' reading comprehension improved on dialogues and directions and reading speed for dialogues and poems. Students with higher scores improved their reading speed much more than students with lower scores, while students with lower scores improved their scores more.

Through the various tests administered over a period of two years, we came to the following conclusions:

1. College students can read essays faster than any other type of passage. They have the most difficulty with poems and dialogues.
2. Students who score higher can read faster.
3. Through one year of training, students improved their reading comprehension and particularly their reading speed. Students with higher scores improved their reading speed greatly.